

對談

山本 鼎

十二月四日の午前、平河町に黒田先生を訪ねた。『白芙蓉』のモデルかと思はるゝ、脊のすらりとした婦人に案内せられて應接間に入れば、先生は藤椅子から軽く身を起こして會釋された。片腕の緋帶が、白く室に目立つ。丁度四十格恰の洋装の紳士と對談中で『此方は博文館の渡邊君です』と紹介される、それへと先生の言はるゝまゝ、渡邊氏と對ひ合の長椅子に腰を下した南縁の日は深く射し込むで、三人は日なたのなかに居る、主人は葉巻を煙しながら談話をつゞけ、客の紳士は紅皮の手帳にペンを走らせながら『それからしまして日本畫に就いて先生の御意見は如何で御座いますか』と訪問の任務を拂つてゐる。時計の鳩がホーオと十一度鳴いた頃渡邊氏は歸つた先生は小間使に東京病院へ不參の電話をかける事を命じて席に復される。僕の先生と對談するのは殆ど二年ぶりである。

△毎度方寸を有難たう、君はなか／＼上手なんだな版を彫るのが。

▲いえ、どうも思ふやうにいけないのです、今に佳い畫でも書けるやうになつたら充分やつて見度いと思つて居ます、
△なか／＼忙しいだらう。

▲さう忙しい事もないのですが、畫はどうもかけませむ、何となく他念に邪魔されて迷つてゐます。

△あんまり頭が高尙になつても損だ。

▲高尚といふではなく、自分の望むて居るやうな、暢びりした氣分で従事する事が出来ないのです。

△それは君ばかりではない僕等にもある。

▲然し先生は全く安心して書いて居られるやうに見えます、全く自分の爲に書いて居られるやうに。

△自分の爲に書くより他に仕様はないじやないか。

▲所がなか／＼さうでないと思ひます、今度の展覽會なぞを見ましも變てな事の爲に畫を書いて居る人が多いやうに思はれます、私はそんななかで先生の畫を見て樂むで書いて居られるといふ事が特に嬉しく感じたのです。

△それは樂しむで書いて居るが、決して安心はしては居ない、昨年の畫は方々で賞めてくれたけれど、何處を賞めてくれるんだか——自分では佳いんだか悪いんだか解らない、自分には何んでもない——あそこの芙蓉が面白かつたので、それをバツクにモデルの裸を稽古したゞけなんで、唯裸のスタデーなんだ、石井君は巴里の夢を見て居ると評したが、それはさう見えるかも知れむ、巴里の畫室アトリエで使ひ馴染むだ、好きな彩いろがどうしても自然に出て来るからな、それにこんな庭なぞを見て居ても自然にさういう彩が餘計に見えるんだ。

▲あーなる程、石井君ともよく談すのです、他人には不自然と思えるが、先生にはそれが眼に見えた通りなんだらうつて。

△けれども僕は眼に見えた通りではつまらむと思ふ、畫は自然他に何物かなければなるまい、僕等は眼に見えたものを書いたゞけでは物足りない。

▲さうしますと眼から這入った感象でなく、何かこう頭うちの裡で出來た要求なのですか。

△どうしてそんな力は僕等にはない、頭の裡でこしらへる力なぞはとてもない、見たものを書くだけの事だ、然し今此庭にこう日の當つた所を見るにしても、眼に這入つて來るものが悉く美しくない、美しいものはあるにはあるが、今の光線には自分の好きな彩が充分出て居ないからこういふ時には畫かない、一日の中にも光線の非常に佳い時があるから自分はいつでもさういふ時に畫く、つまり自分の好きな彩を畫くのだな、自然は決して美しい場合ばかりでないからな。

▲然し先生のお氣に入る自然も随分多くは御座いませう。

△それは澤山ある、僕の畫は始終此庭で出來るんだからハ、ハ、ハ。

▲ハ、ハ、つまり色々の眼があるといふ事になるのですが、石井は先生の畫があまり淡過うすぎると言ふのです。

△そうだらう、石井君にはさう思へるだらう、然し僕の方からは昨年の石井君の畫などを見て、あゝいふ彩は見えないと思ふのだからな、見えないのではない、僕には美しいと見えないのだからな。

▲つまり自然に對つた場合に、灰色をよく感じる人もあるし、黄色によく感じる人もあるし紫によく感じる人もあつて……。

△さう勝手なレンズを持つて居るかどうかわるが、畫を観る時には『各々異つた眼を備えて居る人だ』といふ事を第一に置いてかからねばなるまいな。

▲今度の展覧會に就て、先生の御所感は如何ですか。

△さ、さうさ、大体は先に渡邊君に話して居たやうなものだが…。

▲先刻の御談しでは先生等^{など}は展覽會に對して二面の態度を執つておみでのやうですが、それは却つて後生を過りはしますまいか、私達は文部省の展覽會などでも、審査官の方々が各々の人格でピンピン判斷して戴き度く思ふのです。

△それは人の希望で僕等にはそれは出来ない。

▲さうですか、私共書生の考へでは折角はじまつた展覽會といふものをさう世間的なものに見做してしまうのは残念なやうな氣がします。

△さうだ然しあゝいふものは何國^{どこ}でもさうなるサロンなどに出る畫は厭な畫が多い厭だなんぞといふのは僕等には生意氣な事だが實際デッサンなどは立派に出來て居てもたゞ面白くない。

▲さうでせうな、カタログ^{ママ}で見ても何んだかさう思はれます。

△そこへゆくとアンデパンタンの方は鑑別^{かんべつ}などはないし仲々面白いものが出る。

▲どうしても一方に小團結が榮えて來なければいけませんすなあ。

△是非さうならなければいかん鑑別^{かんべつ}にはねられるやうなものに却つて面白いものは多い。

▲さうなると、吾々の爲には此小さい方が大切になります。

△まづそんな形だ。

△然し其小さい方も急に出來そうもないではありませんせむか。

△そんな事はあるまい、大に盛つて來るだらう。

▲さうかしら。

△我々も日本では今が創始の時だらう、文部省の展覽會を西洋のやうな惡弊に落ち入らせ度くないとは思つて居るが、毎歲一枚にしろ、二枚にしろ、佳い畫が交つて居るやうなれば見付けものだよ。

▲さうですか、心細いな、今でさへ私達の排斥する俗畫が多いのだから、年々景氣がよくなるにつれてさうなつて行くのでせう、畫を畫かうなぞといふ人達がなぜさうなるのだらう、私は怜悯だと思つて居た三造君までがあゝいふ畫を出したかと思ふと悲しい氣がします。

△然し人の事をけなして見ても詰らむではないか。

▲でも俗畫と思ふ畫の、一枚でも少くなる事は、ほんとうの道からいつて望み度い事と思ひますが。

△さういふ事はどうか知らむが、あらを探すより佳い處を揚げた方が良いね、佳いものは少いのだから、其方か手つ取り早からう。

▲さうですなハ、ハ、ハ、ハ。

△批評といふやつは誤解され易いから損だ、石井君などの評を見て僕等は大方賛成して居るか、石井君自身の爲には損があらうと思ふ。

▲さうです、やはり多少犠牲の形ですな、然し一方に自分の言ひ度い事を言つたといふ愉快に酬はれますからよう御座いませう。

△さうかハ、ハ、ハ、ハ。

▲然し今の場合に、石井のやうな人は必要だと思ひますが。

△無論必要だ、今の場合處ではない、いつの時代でも必要だ、文部省の展覽會の反對の側に立つて、方寸などは大に努めて貰ひ度いと思ふ。

▲え、無論さうゆくでせう、特に努めなくとも吾々の性情がさうゆくだらうと思ひます。

△たゞあまり、自分の考へだけで人に迫らむやうにしたいね。

▲それはさうです。石井君などはやはり自分の目の周圍のものを、自分の趣味のものにしたいといふ感情はなか／＼強いのです、たゞあの人の趣味が偏狹でないからいゝので、私共は畫に物の個性を貴ぶ事は非常ですが、畫以外の行爲にそれと矛盾した所はあるかも知れませむ。

△僕も學校の方では立ち入らぬ主義であるが、さういふ點でコランの師匠のカバネルなどは大さう賞められて居る、實際カバネルの門下からは種々な人が出て居るんだ、エーメモローが出て居るし、バスチャンルパーヂュが出て居る。

▲ルパーヂュとコランなぞはずいぶんな違ひ方ですな。

△思ひ／＼ではおかしな話がある、或時巴里の裁判所で強盜殺人をやつた男の裁判があつて、師匠が町の陪審者として裁判に列なつて歸て來ての話に、強盜男の體格が如何にも美事なモデルなので死刑に反對したかつたと話したことがある。

▲どうもそんなものですな。今、ある一方に研究心といふ事がだいぶ重んぜられて居ますが、私は研究心——修業心で畫をかく事は甚だ間違つた事だと思ひますが。

△さうさ、研究の効は自から積まれて行くむだらう。

▲それが學校時代にも無用だと思ひますが。

△然しが學校時代はさういふ氣分の方がよからう、さもないと直ぐ人の模倣になるから。

▲さういふ、熱に浮かされるといふやうな事はよくありませむが、やはり、感興から出立しなければいけないと思ふのです、私などは學校に居る時分、天分の低い爲でせうが、ただぼんやりと研究氣でやつてたやうに思ひます。

△然し學校時代などは小學なんだから其方がいゝ、さういふ時の感興といふやつは、雜誌の畫などから來るんだからな、あのスチユヂオ、あれによくかぶれるから固る。

▲さうです、そんな點もありますな、然しある一部にはカンブスの透けない事を得意にして居る人達もあります。

△カンブスの透けないとは。

▲繪の具が厚く盛り上る程研究したといふ事なんです。

△馬鹿氣た事だな、知らず／＼盛り上つたなら仕方もないが。

▲仕方はありませむが、盛り上るのは寧ろ恥だらうと思うのです、動かない一筆がやはり最上だと思ひます。

△無論の事だ。

▲而もさういふ研究心が妙に歡迎されて居るやうに思ひます。

△ふーむ。

鳩が最高數を鳴いた。

▲方寸に就て、改良したい所がありますなら仰つて戴きたう存じます。

△すべて佳いと思ふが、表紙だね、あれを何とかしたい、毎號同じのはどういふものか、畫をかく者が揃つて居て少し藝が足りないかと思ふ、君なぞが版もやるんだし。

▲さうも思はれます、尤も巻が改まる時表紙も替えるつもりですが。

△するともうぢき替るな、それから畫に個性をあまり強く出さうとしてか、ポンチ染みたのがあつた、あれがもつと眞面目な方が好い、眞面目といつたつて、アカデミー風なのではないが。

▲つまりもつとしんみりとしたものゝ事で御座いませう。

△あまさうだ、ちとベランメーの所が見えるな、ベランメーはベランメーでもいゝが、只のベランメーのないやうにし給へ、唯の博奕打と俠客とちがふやうにだな、然し大變佳いよ、僕は毎度面白く見て居る。

▲私共の希望では、もつと多方面の人に助勢して貰つてぐつと一般的の力がありたいと思ふのです。

△然しそいつはやりにくからう、折角頼むでも君等の趣味に協はないものを寄越されてもよはるからな。

▲それです、一貫した主張を失ふのは厭だし、又頼むで寄越して貰つてそれを取捨してはあまり失敬ですからな。

△アハゝそれは悪いとも。

附記予の記憶はさう確かなものにあらず主客の一句一言の其時唇を洩れし言葉なりとは言ひ難したゞ記憶を偽らざるのみ

【『方寸』三八明治四二年二月】

自画自刻版画を唱え、同人誌『方寸』を創刊した山本鼎との対談。山本は明治三五年に東京美術学校西洋画科選科に入学し、黒田の指導を受けている。文中に登場する黒田の第一回文展出品作《白芙蓉》は『方寸』一七（明治四〇年二月）の表紙を飾り、山本鼎は同号掲載の文展評で「場中第一の好ましき画」と賛辞を送っている。また本文献が掲載された『方寸』の第二回文展合評でも、「今或一部に黒田さんを見そこなつてゐる傾向がある」中で、黒田の作品を「真実に自然に動かされて画いたと云ふ処が見える」として高く評価している。黒田と山本の関わりについては、金子一夫『近代日本美術教育の研究 明治・大正時代』（中央公論美術出版 平成二年四月）を参照。なお山本による前文は黒田が片腕に繃帯を巻き、通院中であることを伝えているが、明治四一年一〇月二日付『読売新聞』には、黒田が雨の日に自宅の庭を散歩中、誤って転倒し左腕及び肘の関節部を負傷した旨が報道されている。



『方寸』1-7表紙